

ブリテン：イリュミナシオン op.18

【特別寄稿】

大野和士が大いに語る、6月A・B定期プログラム Vol.1

<http://www.tms.or.jp/j/topics/detail.php?id=1016>



テノール/イアン・ポストリッジ © Simon Fowler

アルチュール・ランボー（1854～91）の詩集『イリュミナシオン』のタイトルは、文字通り「光」という意味ですが、彼のこの世をはるかに超越した感覚により、異様な世界が繰り広げられています。この詩集の中には、光の輝かしさを賛美すると同時に、その足元に不吉に広がる闇、その影の中に立ち上る幻影、光の照らし出す現実社会への鋭い批判などが、これでもかと投げつけられるようです。ランボーの独特の才能は、光を見つめながらも、それと同時に、ある意味で逆光的な観点から沸き起こるイメージを展開させていると言えるのではないのでしょうか。

ブリテンは、その内的指向性への共感から、ランボーを特に身近に感じていたと言われていますが、それと同時に、神経が体の表面に浮き出ているのではと思わせる繊細な感性、そこから時として呼び起こされる大いなる抵抗力など、両者を結びつける要素は多く、ブリテンがこの詩を選択したのには大きな必然性があると考えられます。

この曲のソリストは、日本でもおなじみのイアン・ポストリッジです。私は2014年春、リヨンで彼と初めて共演しました。曲は、ホルン・ソロのオブリガートでも知られるブリテンの《セレナーデ》でした。彼の声の特徴の一つに、どのような声域でも、ある独特な憂いを含んだ響きを帯びていることが挙げられます。《セレナーデ》は、穏やかでポジティブな楽想が多いのですが、それでも、第3曲「夜想曲」で“Bugle, blow; answer, echoes, answer, dying, dying, dying（角笛よ響け、こだまは答えよ、次第に消えながら）”の部分を彼が歌うと、ほのかな哀調に包まれるのでした。

その際、練習の過程で今までにないような経験をしました。ポストリッジを迎え、リハーサルが始まると、オーケストラ全員の意識がとっさに変わったような気がしました。1曲ごとに、彼の顔を伺うと、彼はただ微笑んで先を促しました。そのまま、全曲を一気に終えました。普段だとオーケストラの団員から一斉に拍手が起こるところですが、今回は一瞬、静寂がその場を支配したのち、深い夢から覚めたように、ため息を含んだ上品な賛嘆の声が上がったのです。そして、彼は再び微笑みを浮かべながら「ありがとう」とひとこと言って、なんとリハーサルはそれで終了したのでした。

《セレナーデ》という曲に、ときめきと同時に、ある不安を感じさせるような甘味を与えることのできるポストリッジの歌う、《イリュミナシオン》にどうぞご期待ください。